

# 幼児教育と交流活動

倉持 清美

幼児教育は、家庭・地域社会・幼稚園や保育園などの施設の、大きく分けて三つが担っている。しかし、家庭・地域社会の教育力が落ちたといわれている。昨今、幼稚園や保育園などの施設が幼児教育に果たす役割は大きくなっている。本稿では、主に幼稚園などの施設で行われている幼児教育について取り上げることにする。そして、現在盛んに行われている

交流活動に焦点を当てたい。幼稚園などの施設では、現在様々な交流活動が盛んに行われている。小・中・高・大の異年齢の生徒たち、高齢者、外国人など、異世代、異国籍と多岐にわたっている。少子化、核家族化などの社会状況とも絡み、幼児を取り囲む社会の中の様々な人たちとの交流活動の意義は高まっている。本稿では、様々な

な学校種との間で実施している交流活動に焦点をあてて、現在の幼児教育について考えていきたい。

### 一・中・高校生との交流活動

少子化の影響を受け、幼い子とかわることなく親になる夫婦が増えてきている。虐待件数の増加とともに、親になる世代の養護性をいかに育むのかわかっている。大学生に行った研究によると、子どもとふれあう経験のある学生は、そうでない学生より子どもに対する肯定的感情が高く、子どもとふれあうことのない女子学生より、ふれあう経験の多い男子学生の方が肯定的感情が高いことがわかっている（花沢・松浦 一九八六）。こうした研究から、親になる前に乳幼児とふれあう体験の場を確保しようとする動きが盛んになってきている。

中・高校の家庭科では、保育体験学習を中核として保育学習を進めているところも多くなってきてい

る。家庭科の授業として保育園や幼稚園に行く場合、全クラスの生徒たちを連れていくことになる。従って、子どもに対して肯定的な感情をもっていない生徒も、乳幼児とふれあう体験をする。こうした体験が、中・高生にとって短期的な効果を示すことが様々な研究で実証されている。概して、子どもに対する感情がプラス方向に変容する生徒が多い。

中・高校の教員たちも、体験学習後の生徒達の表情が生き生きとし、その後の授業が落ち着いた雰囲気になるといふ印象をもっている。

また、行政の立場からも、中・高生と乳幼児とのふれあいの場を推進しようとする動きがある。子育て支援を促進するために次世代育成支援対策推進法が平成十五年に制定され、各地方行政は行動計画を策定して平成十七年四月から実施している。この行動計画の中に、多くの行政が中・高生の乳幼児とのふれあいを促進することを施策としてあげている。

やがて親になる世代の育成を主眼としているのだ。

その他にも、職場体験、ボランティア学習など、様々な目的で、幼稚園などの幼児教育施設が中・高生の交流活動の場となっている。幼児教育の側も、中・高生などとの交流に積極的な意義を見出そうとしている。中央教育審議会では、今後の幼児教育の取り組みと方向性を踏まえ、幼児教育の機能強化のための具体的方策をいくつか掲げたが、その中の課題の一つに「幼児教育を支える基盤などの強化」がある。具体的施策として「中・高生、大学生など親となる世代の活用」があげられている。

中・高生が様々な交流活動の一環として保育園や幼稚園に来ることは、子どもたちにとつてとても嬉しいことのようにだ。訪問する中・高生たちは、子どもたちの嬉しさを感じとり、自分達の存在意義を確かめるということがあるのだろう。自分自身の不確かさを抱えている思春期に実施する乳幼児とのふれ

あいは、そのような意味で意義がある。実施するうえでいろいろな困難さはあるが、それを乗り越えても実施するメリットを中・高校側は感じている。

## 二・幼小連携のための交流活動

小学校低学年と行う交流活動は、幼小連携という側面をもつ。先述した中央教育審議会で掲げられた課題の中に「幼稚園施設の教育機能の強化・拡大」がある。その重点施策の一つとして「発達や学びの連続性をふまえた幼児教育の充実」がある。具体的な内容は、「小学校教育との連携・接続の強化・改善・教育内容における接続の改善」であり、例としては「協同的な学びの取り組みの推進」「人事交流などの推進」「幼小連携推進校の奨励」「幼小一貫教育の検討」があげられている。

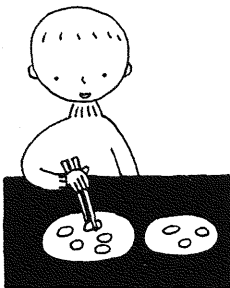
これらの課題や施策は、幼稚園や保育園から小学校へのスムーズな移行を果たす努力をする必要を示

している。その際、基盤となる子どもに対する捉え方は、子どもたちは幼児教育で完結するわけではなく、その後も発達し、学び続けていく存在であるということだ。幼児教育側は、今ここで育てていることが、小学校以降にどのような力となっていくのかを押さえておくことが求められている。そのために、幼児教育側の教員や保育士と小学校教員との交流が、いろいろな形で行われつつある。

例えば、東京都の日野市では、公・私立の幼稚園教員・保育士と小学校教員の代表が一堂に会し、話し合いを重ねながら就学前期のコアカリキュラムを作成しようとしている。各々の園の独自性を大切にしながらも、小学校に進学するときに、これだけは獲得しておいて欲しいというものを共通理解し、そのためには各時期にどのようなねらいを設定したらよいのかを話し合っている。この他にも、様々な幼稚園や小学校で幼小と連続したカリキュラムが作成

されたり、小学校に入学する前に獲得しておかなければならない課題などについて、検討されている。

また、人事交流のような形で、小学校教員が幼稚園教員を経験する幼稚園もある。小学校教員が幼稚園の教員を三年間経験するという公立の園のケースカンファレンスに、私が参加するようになってから三年以上たつ。小学校教員が小学校入学前の子どもたちを理解することを目的の一つとして、その園は設立された。小学校からきた先生達は、時間割がないこと、チャイムが鳴らないことに戸惑い、一斉の活動では子どもたちを集中させることに、自由な活動の時間では自分の役割について戸惑うことが多かった。しかし、小学校に戻ってから、この経験が非常に役立っている



という。子どもを待つようになった、学習活動以外

での子どもの様子を気にかけるようになったなど、

教員側が子どもに対する見方を変えたり、自分の言

動を変えていくことで、なかなか理解できなかった

子どもの言動に対応しようとする。そうした態度

に、自分自身の変容を感じるようだ(倉持・井口・

待井 二〇〇三)。

子どもたち同士の交流活動も行われている。一年

生の生活科の授業の中では、交流活動の指導のねら

いとして、「親切にしようとする、心を育てる」「自分

の成長に喜びを感じる」などがあげられている。仲

良しパーティーを開いて幼稚園や保育園の幼児を招

いたり、一緒にドッジボールをしたりする活動もある。

こうした交流を行うことで、教員間の理解が生

まれたり、小学校の実態、就学前の子どもたちの様

子を教員が理解することができたという報告がなさ

れている。幼児は、一年生の生活をかいま見ること

ができて、一年生になることを楽しみに待てるよう

になるようだ。

### 三．交流活動の課題

交流活動を幼児教育の視点で捉えたときの課題に

ついて、ここでは考えたい。

#### 1 交流活動の前提

交流活動に取り組む場合、次のことを前提にする

必要がある。第一には、小学校以降の教育段階では

時間割があり、融通性がききにくいということであ

る。その点で、相手側の都合にあわせざるをえない

側面をもつ。幼稚園や保育園の年間計画の中で、こ

ういう時期に交流活動を行えばより有意義なものに

なると想定しても、なかなか相手との調整が難し

い。

第二には、同じ中・高生と頻繁に交流活動を実施

することは不可能なので、どうしても単発的な交流

になってしまうということである。子どもたちにお

もちやを作って持ってきてくれたり、紙芝居を見せ  
てくれたりするイベントの一日に終わってしまう  
可能性がある。継続的に交流をもつことができれ  
ば、交流が積み重なり、工夫や省察も生まれやす  
いが、単発的な交流を、その後の子どもたちの生活に  
どのように位置づけていくかは、なかなか難しいと  
ころがある。

第三は、いろいろな生徒たちがいるということ  
である。子ども好きな生徒もいれば苦手な生徒も  
いる。こちらが予想もしないような行動をとる生徒も  
いるだろう。そうした生徒たちと子どもたちはか  
わりをもち、思いもよらない経験をすることもあ  
るかもしれない。

このようなことが前提となる交流活動で、子ども  
たちはどのような経験をすることができるのか、考  
える必要がある。また、中学以降の学校種と交流す  
る場合に、どのような授業でやってくるのか、目的  
は何なのかは、事前に聞いておくべきである。総合

学習できているのか、職場体験なのか、ボランティア  
なのか、家庭科の授業としてきているのか、受け  
入れる側は明確ではない。しかし、授業によって目  
的は違うし、生徒たちの事前の学習は異なってく  
る。それが、交流当日の生徒達の動きに影響を与  
えるだろうし、子どもたちが経験することも異なっ  
てくるだろう。

また、幼稚園教員も保育士も、学校種は異なっ  
ても生徒たちからすれば「先生」である。「先生」と  
して、彼らの教育効果をあげるための役割を担っ  
ている。交流活動の目的を把握し、それに応じたか  
わり方ができることが「先生」としての役割の一  
つだろう。

## 2 交流活動の中の子どもたち

交流活動の効果は、幼児教育施設に行く側につ  
いては、実証されつつある。しかし、幼児期を生きる  
子どもたちにとって、どのような経験になり、それ

が学びや発達に果たす役割については不明確なままである。

交流活動が子どもたちにとって楽しい活動であることは確かである。少子化・核家族化の中で、子どもたちは家庭の大人と園の同輩とのかかわりを中心とした生活をしている。交流活動を通して、「楽しい」という経験に裏付けられた少し上の世代とのかかわりが可能となる。それが子どもたちの世界を広げていく結果につながるだろう。

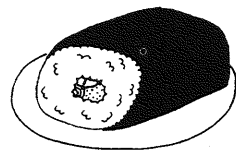
一方で、交流活動では、幼児の方が低年齢である場合が多く、赤ちゃん扱いされてしまうことが多い。幼児が年長であれば、いろいろな事に先頭立ち取り組み、幼稚園や保育園のリーダー的存在として主体的に考え動くことが求められ、それができることに自信を深める時期である。それが、交流活動では、「教えてあげる」「親切にしてあげる」対象とされる。そのことが、彼らにとってどのように受け

止められ、どのような経験になっているのだろうか。

子どもたちが交流活動で経験していること、そしてそれが子どもに与える影響について、短期的・長期的に検討していくことが必要だろう。

### 3 交流活動の中の教師

幼稚園や保育園などの教育施設は、年少の頃から仲間との関係が維持されていることで、子どもたちが安定して安心して生活することを可能にし、それが子どもたちの成長発達につながっていく。しかし、関係が固定化され、子どもたちの異なる側面を引き出すきっかけがなかなか見いだせないことがある。それが、交流活動で様々な人とのかわることによって、子どもたちが日常の保育の中で見せな



かった側面を引き出す機会になる場合が生じる。保育者とのかかわりの中で自分を出していなかった子どもが、年齢の近い小学生や中学生とのかかわりの中で、自己発揮している姿を見せるかもしれない。それを自分たちの保育の問題と内省的に反省するだけでなく、その子が保育の場面で自己発揮できた良いきっかけになったと捉え、それ後の保育でどのようにつなげていくかを考えていくべきである。交流活動のメリットの一つは、このようにいろいろな人とのかかわりの中で、子どもの新たな側面を引き出せるということだろう。

また、交流活動は、中・高校側の立てた内容によって、進められることが多い。しかし、幼児教育施設側も、交流活動を通して、子どもに育ってもらいたいねらいがある。教師は、交流活動の中で、子どもたちが経験していることをしっかりと見つけ、その後の保育につなげていく役割を担っている。幼

児が交流活動の中で様々な年代とかかわりつつ、幼児時代をしっかりと生き、未来につながる力を獲得するために、交流活動をどのような活動にしたいのか、幼児教育施設の側が積極的に発信していく必要があるだろう。  
(東京学芸大学)

#### 文献

花沢成一・松浦淳「男女青年における対児感情と乳児接触経験との関係」日本教育心理学会第28回総会発表論文集 356―357 一九八六年

倉持清美・井口眞美・待井ナオミ「小学校教諭にとつての幼稚園教諭体験―「遊びを通しての指導」の理解を巡って」東京学芸大学紀要 第55集73―82 二〇〇三年

#### 資料

平成十七年中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化をふまえた今後の幼児教育の在り方について―子どもの最善の利益のために幼児教育を考える―」